

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 14 日現在

機関番号：13501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K02810

研究課題名(和文) 東京高等師範学校附属中学校英語科の英語教育界への影響の研究

研究課題名(英文) On the influence of English course of the attached junior high school of Tokyo higher normal school on English education in Japan.

研究代表者

古家 貴雄 (FURUYA, Takao)

山梨大学・大学院総合研究部・教授

研究者番号：30238696

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果としてそのいくつかを指摘したい。まず、東京高等師範学校は、戦前のほぼ唯一の中等教育の教員養成機関であったが、英語においても、学生のその教育実践の訓練をする最も重要な教育機会を提供していたのが附属中学校で、その教育方法がオーラルメソッドという口頭中心の英語教育であったため、オーラルコミュニケーションの教授技術を持った学生の輩出という点で英語教育界に大きな影響力を中学校が持ったことが明らかになった。次に、東京高等師範学校の卒業生は高い英語力と口頭の英語指導力を持ち、いくつかの地域でオーラル中心の英語教育を実践し、その方法を全国に伝播させた。その代表が福島メソッドと湘南メソッドであった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の学術的意義としては、H.E.Palmerが考案したオーラルメソッドが東京高等師範学校附属中学校の教育実践の中でさらに改善され、日本の代表的なオーラル主体の英語教育の方法となり、中等教育の英語教員の養成に如何に貢献したか明らかになったこと、また、附属中学校の英語教員が『中等教育研究』という研究誌の中で自己の英語教育の研究成果を発表し、その成果が附属中学校で活かされ、日本の英語教育界にも影響を与えたことが明らかにされたことがある。社会的意義としては、現在課題となっている英語のオーラルコミュニケーションの指導方法の原型が明らかになり、その原理として何が重要であるかが再確認されたことである。

研究成果の概要(英文)：I would like to point out some of the results of this research. First of all, Tokyo Higher Normal School was almost the only secondary teacher training institution before the World war , but even in English, it was the attached junior high school that provided the most important educational opportunity including teaching methods for students to train in their educational practice whose main educational method was the oral method, which was an oral centered English education. This reserch was also revealed that its junior high schools had a great influence on the English education world in terms of producing students with oral communication teaching skills. Next, graduates of Tokyo Higher Normal School possessed high English proficiency and oral English instruction skills, practiced oral-centered English education in several regions, and spread the method throughout the country. Representative of these were the Fukushima Method and the Shonan Method.

研究分野：English language education research

キーワード：東京高等師範学校附属中学校 新教授法 福島メソッド 教育実習 中等教育研究 英語教授法

1. 研究開始当初の背景

令和元年度より4年度までの間、科学研究費の需給を受けた。そこで、最後の年になる令和4年度、報告をさせて頂くことになった。内容的には出版予定であった博士論文に基づいている。結局、学位授与は今後に持ち越されたが、ここではまず研究開始当初の研究の背景について述べてみたい。

本研究では、戦前の代表的な教職教養教育の機関である高等師範学校、その中でも特に特徴的な英語の教員養成を教育実習で担っていた附属中学校の英語科に焦点を当て、主に、3つの問いを立ててその追及を試みることにした。1つは、附属中学校の英語科の教員たちの英語教育観の追求である。2つ目に当学校の英語教員の英語教授法観の追求である。最後に、東京高等師範学校を卒業した学生の教育現場での実践的な貢献と日本の英語教育界への影響力である。以上の問いについて、東京高等師範学校や附属中学校が当時発行していた研究雑誌等を調べながら、特に附属中学校英語科の教職教養教育の特色と成果について調べ、高等師範学校附属中学校の影響力を明らかにしたいと考えた。

基本的に本研究の背景には、英語教授法、英語科教授法が戦前の英語教育の教員養成機関でどのように取り扱われていたのかということが問題意識の根底にある。ここまでの英語教育教員養成カリキュラムにおいては、英語教育的な素養(英語科教育)を育てる教育科目よりも教科内容の素養を育てる英文学や英語学の科目に重点が行われていた。最近こそ、英語教育の教科指導法の科目の重要性が指摘されているがそれは本当にここ数年のことである。英語科教育的素養が戦前はどのように扱われていたのかを興味を持って調べてきたが、その科目を英語科の教員養成のカリキュラムに唯一取り入れていたのが高等師範学校である。また、高等師範学校の附属中学校の教員が実際に高等師範学校で英語教授法を教えた事実が明らかになり、また、附属中学校の教育実習が高等師範学校の学生の実質的な英語指導力を養っていることが分かった。

そこで、特に東京高等師範学校の英語教育、教育実習、英語教員の英語教育観を明らかにすることで、東京高等師範学校を卒業し、オーラル主体の教授法を身に付けた卒業生がどのように英語教育界に影響を与えたかを究明したいと考えた。また、附属中学校の教員自身が、当時の文部科学省主催の教員研修会の講師等を務め、当時の英語教育界をけん引していた事実があるので、その影響力も明らかにすることを考えた。

2. 研究の目的

次に、本科学研究費に基づいた研究の目的の概要であるが、主に2つある。本テーマ「東京高等師範学校附属中学校英語科の英語教育界への影響の研究」の研究目的の1つは、附属中学校の英語科の教員たちの英語教育観の追求である。東京高等師範学校の附属中学校のオーラルメソッド、またこのオーラルメソッドを教育現場に適応させるべく改善された教授法を新教授法と呼ぶが、その導入は岡倉由三郎によって行われ、その後、附属中学校に着任した教員によって実践された。また、附属中学校は研究雑誌として『中等教育研究』を持っており、附属中学校の教員はそこに自身の研究成果を論文として投稿していた。英語教員スタッフも例外に漏れず、多くの投稿があった。昭和6年から16年の間である。ここには英語科教員の英語教育観が書かれており、その分析をする中で、彼らの英語教育観を明らかにすることで、附属中学校の英語教育への影響や彼らの教育観の英語教育界への影響が見られるものと思われる。

次の研究目的として、東京高等師範学校を卒業した学生の教育現場での実践的な貢献と日本の英語教育界への影響力があったが、その状況を調査することが研究目的の1つとなった。卒業生は全国の中等学校に散らばって行ったが、その何人かはオーラル主体の英語教育を実践し、その影響を全国の英語教育界に与えた。主に、福島メソッドや湘南メソッドという形で結実した。その辺の影響力の伝播の状況を追求してみたい。

3. 研究の方法

本研究の研究方法として、まずは、東京高等師範学校の英語科のスタッフの教育実践、新教授法の状況、彼らの英語教育観を明らかにするために、彼らの研究テーマに関わる文献資料の発掘を進めたい、特に附属中学校の研究機関誌『中等教育研究』の全巻を集めることで、附属中学校の教員スタッフの研究業績を調べる中で彼らの英語教育観を明らかにしたいと考えた。また、さらに明治、大正、昭和初期の英語教育関連の文献収集を行う。研究方法については、引き続き、『中等教育研究』の英語関連の記事の内容を分析しながら、附属中学校の実践的な特徴の研究、また、日本の英語教育界への影響を明らかにしたい。次に、附属中学校のスタッフの研究をさらに進めた。例えば、昭和初期に活躍した石橋幸太郎や中山常雄、左右田實等である。

次に、東京高等師範学校の卒業生の英語教育界への影響について明らかにするために特にオーラル・メソッドを中心とした新教授法の全国伝播について明らかにしたい。具体的には、湘南プラン、福島プランの実践状況とその実践の応用状況の検証を行うことである。以上の内容を研究しながら、東京高等師範学校の英語教育界への影響力についての総括を行いたいと思う。最後は報告書を発刊し、本研究の成果をまとめた。

4. 研究成果

本科研費に基づいて達成した研究実績・成果の概要であるが、本科研のテーマ「東京高等師範学校附属中学校英語科の英語教育界への影響の研究」の研究目的にしたがって成果を述べる。

(1) 東京高等師範学校附属中学校の英語科の教員スタッフについての履歴等を研究したが、ほとんどの教員は東京高等師範学校の卒業生であった。卒業後、数年間、他の中等学校で教員経験を重ねて、東京高等師範学校の教員の推薦で附属中学校の教員に採用されることが多かった。附属中学校で教員をしながら、英語教授法の授業を本校の高等師範学校で出向して教えることもあった。教員の多くは附属中学校研究雑誌『中等教育研究』に研究論文を発表しながら実践と研究を行い、ほとんどの者は東京高等師範学校の教員になっていく者が多かった。

(2) 東京高等師範学校附属中学校での教育実習は4年生で行われ、3～4週間続いた。最初は附属中学校の英語教員の授業を観て、その後、実際に教える。現在の実習の形態と同じである。ただ、実習中は、附属中教員が指導だけでなく、本校、高等師範学校の教員も指導に来て、連携が取れていた。また、最後の実習生の研究授業は附属中学校の教員スタッフと本校、高等師範学校の双方が集合し、実習生の指導に当たった。

(3) 附属中学校の英語科の教員たちの英語教育観の追求の問題については、特に岡倉天心の「茶の本」の訳者で有名な村岡博に関して論文を執筆、発刊した。タイトルは、「村岡博の英語教育観とその教育実践方法」(山梨大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第26号)というものである。内容は、戦前の教員養成機関において、学生に教師の教職的教養教育を提供したほぼ唯一の学校である東京高等師範学校の附属中学校の教員スタッフであった村岡博に焦点を当て、彼の英語教育観や英語教育実践について述べた。そのために彼の教育や教員生活のキャリアの概略の説明から入り、彼の学校で実践されていた新教授法の論考、初学年の英語教育導入に関する論考等について見た。その中で述べられた村岡の英語教育に関する指導観や英語教育における特定なテーマに関する考え方について、その特徴を考察した。特に初級の生徒への指導方法は村岡のアイデアが強く反映されていた。ローマ字の指導方法については特にその特徴が表れていた。

(4) 東京高等師範学校を卒業した学生の教育現場での実践的な貢献と日本の英語教育界への影響力の研究目的については「戦前の東京高等師範学校の英語教員養成における附属中学校の英語教育の影響について」(中部地区英語教育学会紀要50号)を執筆し、審査付き学術雑誌に採用された。本論文では、附属中学校がオーラル中心の新教授法の実践的取り組みを革新させ、日本の英語教育界に影響を与えたことや附属中学校のスタッフが文科省が主催する中等学校教員対象の講習会の講師をする等、日本の英語教育界に影響力が大きかったことを資料を駆使しながら検証した。なお、附属中学校の研究機関誌『中等教育研究』の英語部門の研究論文の分析と英語教育的な意義についても議論を行った。

(5) H.E. Palmer が発案し、日本に導入したオーラルメソッドについて、附属中学校の英語科教員がそれを日本の英語教育に合うように改善し、附属中学校で応用した。Palmer のオーラルメソッドは英語のみで授業を行うものであった。もちろん、使用される英語は簡易なものであったが、附属中学校の英語科教員は英語理解のためには日本語を使う場面を授業に入れないといけないと認識し、そのように本教授法を改善した。附属中学校の生徒の英語の能力の伸びがそれによって実際に検証されたことも論文の中で記述されている。

(6) 東京高等師範学校の卒業生に関しては、主として口頭による英語教授法、オーラルメソッドに関する新教授法の実践を全国に広めたという点で大きな影響力を及ぼした。代表的な実践は昭和10年代の「福島プラン」(福島中)と「湘南プラン」(湘南中)であった。その他新教授法を導入していた中学校は田中(2012)によると青森中、函館中、神戸第三中、人吉中などであるが、特に青森中には東京高師の卒業生が13名、函館中には7名と多くの教員が赴任していた。ただし、これらの中学校で5年間すべてにおいて新教授法が行われていたかといえばそうではなく、特に入門期がこの教授法で行われ、4、5年は入試の読解力を付ける目的もあり、訳読法が行われていたという。ただ、これらの普及が全国に伝播したかということそれはなかった。高等師範学校の卒業生は、オーラルスキルがあったが、他の教員養成機関の卒業生の英語教員は英語力がなく、オーラルの授業を進めることが厳しかったようだ。それが普及を可能にしない理由の大きなところであった。

(7) 総括として、日本の英語教育界への影響として、東京高等師範学校附属中学校が果たした役割はとても大きなものであった。まず、オーラル中心の授業を実施する英語教員を多数輩出した。ただし、その数が比較的少数であったため、大きな新教授法の普及は叶わなかった。次に附属中学校の英語教員スタッフは自らが研究者、実践者として活躍し、文部科学省の夏季講習会の講師として、全国でその実践方法の普及に務め、全国の中等学校の教員に影響を与えた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 古家貴雄	4. 巻 27
2. 論文標題 英語教育におけるテスト作成方法とパフォーマンス評価の方法について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育実践学研究：山梨大学教育学部附属教育総合実践センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 319-328
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古家貴雄	4. 巻 50
2. 論文標題 戦前の東京高等師範学校の英語教員養成における附属中学校の英語教育の影響について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中部地区英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 25-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古家貴雄	4. 巻 26
2. 論文標題 村岡博の英語教育観とその教育実践方法	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育実践学研究：山梨大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 169-178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古家貴雄	4. 巻 24
2. 論文標題 東京高等師範学校附属中学校の『中等教育研究』に描かれた附属学校の英語教育実践について（その1）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育実践学研究：山梨大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 139-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 古家貴雄	4. 発行年 2022年
2. 出版社 自費出版	5. 総ページ数 111
3. 書名 東京高等師範学校附属中学校英語科の英語教育界への影響の研究 報告書	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------